宋因耕筆

二

内閣文書庫

和書門
類
一八九五ヮ號
二二三函
一ヲ架
四冊

内閣文庫
和書
類
一八九五〇
號
四冊
二二三
函
四
架

内閣文庫

番號	和 18950	
冊數	4 (2)	
函號	213	34

国立公文書館
National Archives of Japan

閑田耕筆巻之二

人部

○凡人の身に於る其偶然といふもまぬかるゝことあたはぬは冤
也因果よりいへばその積(ミユミ)よりありて此菓(コノミ)をうくる理(イヒ)と菅公の冤
とかいはまほしけれども菅公の御謫よりして流罪ならで左遷し給ひて
は御生存の間は冤(ムジツ)を薨後雷電の変となりて禁中を驚
しめ給ひしは世にも冤をかくしても冤と免まぬかれ給ふこと
あまたなれども写本の忠良才能謀反なくて罪を得られ
しいはずに及ぶべき記事ならぬも柳生の公をと語り
なるものは御作に詠じし作紀したまへるは去年今夜侍リ清
涼ニ秋思詩篇独リ断ツ腸ヲ恩賜御衣今在リ此ニ捧持テ毎日拝ス
余香ヲとあるも都府楼ハ纔ニ看瓦色ヲ観音寺ハ唯聴鐘声ヲ

とこれに一歩をも譲らず用ゐられ給ふと世の初めと聞く天
祥山より行りもしと天しあるまで行つるまで天関のたがひとこと
されども計寛にもりまる蔵のたがひきなりといくばくの
世にまること所謂ふふりて偽るまいぬよりて記
○度庵天祥の像といふ世に豊臣宋紹山無準師範鑒
禅師よりこれて衣はと授りあり図像の事実い相
国寺清源院風和尚乃外宋宝治集より試去侍者
らんかれ帝の衣紋はいかのことにあらずしかるに
尤いまも伝世の具奥より意味二十七年庚寅甲寅
四此像と図しまた清師乃賛ともむ又
もとより先人天祥図の山乃使善説屋と京師より
来まり四条住庵を兼堂より天祥の画像と

称ることなきを拙きをもふ迎ふべ堂ふ投沢堂
医伝の真和尚なり伝ともに天祥とるもに神より相国
附より小袋とりて伝ふ我無準に考て衣と受ふ
何の謂ふ青訳者て四明乃天祥の像を降ふ使侍
僧より命して求ふ求ふと廣ふ図像真ふ説ふの
二人相業ふ不已脱切悟心精庭和尚仏賛図ふ此事
ふ爾ふ乃ふ此像と授ふ云ふ治集今此四
中雅亭院の什あり朋徐建ふ人の画ふ像より朋
の僧ふ称ふ庵桂悟師賛と伝ふと四明慶仲
称ふ人明人ふ此像と画ふ初ふ
おれ伝ふ手伝ふ用ふ王の像と
借りて求ふ伝ふ西土の服とふ

もろこしにもかくてたりけるを絵かくことも後徳院の説にも見えて
此叟絵を作るとも、ふでも拙ければよしなし。続を図像の様は
画きたるは、それ図像の様にはよし。又近き頃華山和尚の語りにも
件の仏衣は事故と載するが、其の後知らず。ことふかく絵をかくに
ほとけも定まりて、いとも絵かきつる事衣にて、今の世にても、いと神妙なり
梅の子も書にいたる時まいりて七山乃縁を載られたりしと見え
又竹芭蕉人絵を臥して作るは、文政元年九月廿四日吹雪
未詳の縁に大阿神京に無双の像を大阪の画工の書云
れ云ふ町にかて関帝の像を写して新しくする事す
又一しく関帝もしや霊験もありて、今も後世までも絵ありて
おもはるゝなし
○武帝の関羽の水墨の大軸の像ありて、御目見の時もとりてよ

それ絵にて人も山中を登りて人常に祈りし絵を人中に写して
付にける諸人とうとんで帰りけるが、その像ありし絵の中に写して遺
すゑ時期に絵きいつれの頃かの材とするかうれの折々に彫刻したる
や中にありて掛りしかば、中にもうし大刹をなすがかうるしと説は他の
実名も讃ある新たにしと書かれしかとまうすらしはいでに入
人まちは宝物に居住なりて華厳大師作に書も出されしまたにて像を
画かきしは揚げまし不思議にるや、なにもいうもの中に写しけり
此寺の人々にありもとは絵造有子出る
でくもかに絵に外題多くにしきすし此なる前の傾きと聞ゆるは武将家の
名ありて大名に飢人は布いし、其の人材にて画と定めたり。又かし名を
べきの子なりけれ、徴とはせるもの名にしたりし、わりもかまりたる
記して伝じるにきこゆれども無くして、何後の傾と伝ふるし、ちなみの
かざなりとすくるがいはむべきものそ、絵に人をして問ふは紫に汗

さうもの数うらん

○齋明天皇異朝よりわたりたまひ御舎利をまつりて御願所として
おかれしより此寺にこの寺をはしめ給ふこれ古の真
ふるきをうつしたる寺なり本尊ハ十一面観音にて作ハ
こもつとも古くして此本尊をうつし齋明の御裏月を記す
やうる故老の作にあるべしとぞ

○小野篁ハ閻(エン)王の臣として常に冥府に往来して其
大臣(冥の臣)なりの事を記して上冥府に生れ六道の辻に穴
ありしとかしかたる女冥に閻王の像をうつし六道の辻の事
なりし所にこの寺の事をかたりしかば時にこの寺にきたりて
閻を開きこの像をうつし冥府にあり是ぞ其像にて今にあり
是ハ冥途の亭にありてまた常に此寺に詣でたまふとぞ

なりけるかの親類にて惟(カナ)しみ此御堂に参りたりといふ入道
乃前住の日も此寺に参りて念仏してその人も此寺に往
のこととてこの母ハ菩提のために是を寄付せしものなりとぞ
そのとき給ひけるとぞ

○鶴林寺ハ聖徳太子の御建立にて堂塔一宇乃
荘厳をつくし金銅の仏像をあまた安置せられしより
あまたの仏をも作りて仏の(タスケ)をうけんとて本尊を記して
其時ハ安置の本尊より此寺にうつし奉りしとも申す
探(サガ)り見るに三宮月山の紀録にも棟(ムナカタノ)像新社加賀村小松にあり
開基ハ此寺にありて造像は大和より移され
大願を発して今古来此寺にありしと山科西向寺の南
寺にも此社は東山の小松内府重盛公の建立ありし

陳(ナンシン)に渡う石剣の阿育(ヒ)院の碑あり所ありしも年代の久敷して
殆ども無き世間の伝ふる所にて此寺の開祖業
西域の乃肉末尼なりと云ふ傳説師ありに入宋せられ
人よりて伝ふる所の後(キ)やうの三回の説教
の御師と一礼を尊ぶべきみて一切衆生を救ふ
情況せるに仏法の後やうとなりて一切法の
義の博多の八橋大夫の物語りの如くなる
奥ありて一切法一年書写の人釈良反(ラ)所書(ラ)
業結のくれり来れば云ふ下に記せる所なるべし
物と云ふ富れ世しし善者と尚いふ信記弥よ人
もあれかるべし今月一義の所とするなれの頂路
○平部の物語りとなる人安信仏法

後日を紀りも既に記されより仲麿いかにそもそも代ようと
物ようとふ所にて交と結ひ所の光輝ら二し月は
陽られて帰朝の民設せられし付貧かりも安部
陽廉(レン)なりしとなれば仏教おかしみ人多ありべし
中ごろ大仏を奈良に無い彩色の人をるに求法のため入唐し
三ようる仏寺王の弓崇ようなる帝代のこと二度心の
初めも経量桜井の人とふ人毎に求法の
志乱と遂にやられ大なりの男の代乃ことふ儒教道
これられ道と称りの志い無毎ようし
○世に代人仏法を深ようり仏ばりの人をそ
もも代世ざるい深なきと孫ようる代出仏い本尊の仏い必要祈と
外ばと乃御の仏代仏像い必為りに仏師と云ふ所を

義汁と宗ちてゐ風ゐ行ゐの法公とつゐ和尚者流いひ
物ち汁ゐみてゐ月氏ゐしとみてゐながらたいうてゐ
兼ゐ法ゐいはゐて世ゐ
義法ゐ行ゐて祝ゐいゐ行ゐ和尚ゐ行ゐ
徳と宗ゐ世義ゐゐまゐ

○藤原不比等ゐと法師ゐ相ゐ
みゐゐゐ行ゐ同ゐゐゐ
序ゐ物ゐ一ゐ物系ゐ物で
ゐゐゐとゐの行ゐ
法師ゐ加家ゐ人ゐ
とゐ待ゐゐゐと解ゐ
ゐて農ゐの対ゐゐ

ゐりゐ南ゐの法加ゐ
五ゐ国のゐゐ
ゐゐゐゐゐゐ
同ゐゐ法ゐゐ韓人ゐ
市ゐ日ゐ紀ゐ人法
須日ゐ紀ゐ人ゐ
満教宇宙加賞ゐ元人望
義法ゐ餘ゐ如ゐ
郡前ゐ志ゐ義法ゐ
とゐ法ゐ人ゐ
教ゐゐ儒ゐ
ゐ和井白ゐ見ゐ義

ゐゐゐ法ゐ和尚ゐ人ゐ
ゐ国ゐゐ法ゐ
ゐゐ韓人ゐ
ゐ法ゐ加ゐ
ゐ廃帝天平宝ゐ
ゐ追ゐ国十二郡
ゐ法ゐ九ゐ
ゐ法ゐ人ゐ
ゐ儒ゐ
ゐ公氏ゐ法ゐ

ハ丈郡乃人までも不仙とらるべし

○役小角ハ朱代出家僧を役さんらて法の鬼神を驅役せし葛城

一言主神醜かりしゆゑ昼を憚りて夜のミ役ず故に逆鱗

するを小角怒て一言主神を呪縛して谷に籠しめたり

出家の手前にかやうにもありけるに辨じかねてけり御答の

小説なれども才一を一言主神を醜しといふ事いかゞと見えたり

日本紀雄略天皇の巻に帝狩し給ふ時に形容全く同じき人

出来りしを帝とがめ給へば一言主神とこそ名のり給ひ但其

狩しての御たのしび給ふ人同車して容見る人もなくいはんや容貌まで

帝と同じくしもし給へばしけれハ容貌も出家僧と役せしを

いふに醜きにはあらず形又神毋方自立なるハ醜くハあらん

たゞ何ぞ一笑んべし

○天智帝御鍋一隻を召されて天下の事ハ一説の非ハ日

本紀万葉集等御遊例の事より有之詳なる事言之

○此比平ら盧々人會の宿老又長人と論する人説を出し人を

あざむくにてかきまうけのなけれバ備ふる事ハ自ら非ハかきさん

人の海中藻刈に歌ハ浦人の海女に浜の事は此侭に寺

并なる事なれバ并合よりつくにかれの言れハ安房

さりたる積徒の為に歌を献ぜられ尊ばれて芳きに常の連歌と

朝まして出れがむなしき并ハ并にあらぬ事しもそ人とハ

ゑ分がたきよりの翁の事を代々人ハ此にし作あ

とみがもとの君とられし附に住業入門并并の道あるとを語

ゝれハ此らんに此との常の人がもれも并の人々のまとひてハかさして

なる道まで又此所の全ても貴き者なしまのれがやうに翁眼

の名ひふ所おほくとうく徹人なれば世のうでらふいさう
ちげはしこまたく集乃紅葉の窓前とほくれなゐ
紅葉ども多くれば花もまたふの所よりて百兵乃用よ
人とときまれいとんとりてとこれきてらわれたるもくめで
花もこれ乃ちとなりそしこの寄ともこしなつてなし
まて去れつりき世牛ものとりて流まてよ
夜ごよが多かしくたるまる知れ沖ちりんすの名ひと四ら
ともけば信と奏乃れるとりル四つ名ひとちてば
かりまるびよりもてもて戻りたし言ま奇合れ中ふ寄
信意といぶやにいまたわらびいふこしとちらふ所
もい人まこれる月馬あ乃故事をとこれまて海こ奇げる
まりにれまし流よしたくる意の奇にふとれてもひやまこん

意とい人のうしみで去写しわこまもれ所れのかもた
乃奇行どふりとどりに名屋津女と艶こ絵くよ去て
達ちうこと流ぞこそとと原入乃屋乃判はもくれこまれ
ば青屋氏三中の中にい中名こ陽屋の顔なこの人乃みもん
こも名人行ばれ屋作の人このなこの通り名屋い
青顔情ものなりて画よりきれて蒙求学院なこ
人えこふ所顔ものとてこげるかふ入き屋の心つきなこりて
干潟かと名こうこれぐこもこれ名こ青小玉深山
なるこふ所ひこはの考牛こ所れい去年屋氏ふん
画氏とりて国こて陽女ところ氏こ去象と屋に画よ心り
行りてこれと行とて女むとやこて名屋ま去つれば中こて氏と
ゆきて金こりこなんけれみの氏れ所みことんは顔情こて氏せる

ばにありし唇れはこれはなにとぞへは来りけりやありんけるぞあ
しかれたにはさてしつるべしかるけれどはさてと悔でし遊
ゑて弁の里へ来て屋用られしはるゝなりとも此うそれ
判事の心得をやすに見れられしものかへおしこそぞ
の唇はかりして世をたゞれなるべしと弁にの行末なりけり
ふあれづゝけりさ前てもはたもの秘かなこり用ふる人スキ数
きうそやりし二条家乃猪へ参りしねば用ぜしむて人まあれかの
ごれ弁しと弁は一筋よ頼しむしむ其人乃なくしむかし侍りけるね
ちうぞかしとも思ふるしとはしむべきなれは人もあれかし
弁しと弁は我思ふしたてずしたまもあらねばおたんぬとうたこ
とよてしなりし拝つゝはいふべき今の世はうかゝたゆいにおよ外
童業稿とそあるよと弁来ざほどむかしあとたとれさまうし記寺

みでもいふとしへにくゝ来たゞれるゝこととも弁出くもの
あろ人をあさしやれなんはけんのためにかるゝわざしたうらんと
いて侍きゞふ此侍徳をしもさうでおかげつゝてよ弁さいはも弁
うきれし信チウ儀はまるゝびゝは入きよろびの世記人のなりしてぞし
其あれしらぬえの道よかくとふつきて次なしたゞかれしそ人では
あるぞしあらんのみべしも記弁のよ思ふてやてりふてしいらん立つし
○青年龍州盧乃談は武蔵坊辯慶は俗聖族倉氏一条
諸の国にわかり悦久使下侍従直情親孫傳律寺があり
辯慶も京にあり最尚よりして入百弁瑞雨が達ちらん
のんれば出やし冗深チフカ爾に産が尼位の牧手して乃一此院辯慶誕生
のおよて産ウブユ湯の水もさも霊ともつ杜も又熊野別当辯さへ
がうもいえいはず?(なり)しし熊野に別当は信られめて記之り ??に賤ふ

も辨慶がごとしうつくしんえびす武人いと可　水戸大日本史も
此人の伝はなくば義経伝下伊勢義盛伝後嗣伝忠信伝のこと
○辨慶義経と共に武人の名を新と為れしと義経記
おんえ坂を作る法師林の内の三寺お数てといふ
除下に記されし事物今く用ひらるべい四寺相数て
つくづく但虚実いとべし
○嵯峨帝九年武内宿禰祖先よりて後と云て
教さるべんらけき故直延真根おいて人共見有深
ふ仕ることもて有様よ説て西ひて教ようしたるれば
て朝に仕ることを此を作るまいて名と出ることを作るいまと
ふ仕ることの言ことを知ていまもひとを人まねてもいまそうで
亦もしも知ることを作ることを仕ふ人の見仕ることりやうしりなふ

ぶ史乃年ことをもちて神代紀よりを慶長のことやうて
もちづらをなづらをなれる数とをいしのられ学ばびて
源氏ものがりの人名室乃ことを作らりてむづ浦ねなどのれ
所ふりてんばくもわり様ろうる自ことのことれそのの
ることりてりることるい神代のまもの神をが出れい
故郎は日本紀とりて考りて和名わりもこれをいうあわん
○古事記ふ三巻伝ひ伝を紀と也学ことて及石屋と
ことを及ひ伝ことを石沈と馬村と中今しまる新
別とまうて学とうのなことは学及切ことをいふわ伝構造熟と方
伝ことをこと也ことを神漢ことを伝ることこれ
ことり常に伝ことを造船とを和りて初い形を
○後日本紀大宝三年下に衣造孔のこいを伝慶ことえ
下に文武ことを報加ことを老人年一統ある学ことあと賜ことを原秘用

連阿法師といひ世なのやうの名と換せてこれも因紀よりの
されども庚人のうと付らる類い藤原行平の子相如の孫尚
相如い後もそも閑相如とうとやこの頃相如つきて孫を孫
無忌のどにあれいばもの一代平いかもりも禅家の古法
の号と付人のるもやうるいばらもれしみが
○百二代後光園の帝嗣後ら後光園院と代りもの金り
て帝位はかまもりこれい安の道行歌王の帝は崇光院
より四世人は前見利義尚將軍帝位よつけるべき帝に代と
一体よ落る事ともこちらに世をよとうるさうも祝
紀まんもも小りて新井白石の漢史解論も流れ名付
南朝後亀山院のうるふ金文字人南朝帝系の付南朝の
帝未一代ものうるふ帝位はを為べき帝源ふ行もしうへ

幸にけ付南朝の帝未働なれい南朝つ帝まもも後せ系
らせい見利氏の伝義も行ぬ帝即位のなを事紀
の俗記小留のうさを陸起もしり世八義尚止ひもの
ぬるを利氏ものるふるるをはじて一体のはるれなるば事後
ふ時うもうあやしひてわ尚ハまも後小松院の後流しうつ一説よ
ふいうう吉書よわてもうもそうも後やも記ハ街巷のふ
説ふて憑ひうるもるれいばもるくハ一体和尚の寛まるべし
○寛保十七年家ふ将ものよ人後制の帝ふ象流和尚ハうは
乃名ものもの家ふ後の帝ものを本裏度せ此和尚の表新よ
より幕府のと徳よ主一十無あ体しうも帝ハ名実あ
ふ隠りて主たもれぬ人ものふ後制のふれいるり書とうせい
此帝家ものうるうと歩て回信よ変ものれい命ふと述よ

天竺寺と号し、となりに山もと辨せしと陳ぜられ、象潟も
西行のいさめ、ゆかりの歌、一旦詠とうけて今にいた
辨ずべからざる歌なれば、ゆかりあるべきの所、天下大錯誤ふ
う金牛を怪と抱しかども、仏施多く金牛を仏とおきて遂に
ものれぬ彼本所の言遊ぶ所、とく人皆疑ふ所なりとて、そ
どいろいろ、○そもそもの事、学ぶ所、元竜の情あ
たりふかやうなるよりなり
○藤門大屑和尚の法嗣拙堂和尚、いつ行脚遊化の間、
開基のうちもの、拙堂大屑と称し、そもそも仏祖相承の
はるかに六月の開基、ただ寄像をもれ、能をありて学徒と
偕ぶ、れ、ふけてもと解し、法心和尚の法は拙堂和尚
十徳東北と称して、深く仏像および寺院大のあるいもつ

のれ遂にやとい、仏祖仏の事なれども、夏殿の沢、
法心、東海とよ
○大石良雄と称する人、同初、赤穂に死と賜ひ、居藩と
官ふ、ありさはを才をもて、家に興りまれ
と称してもまぶ、しかれば、吉良氏と対して復讐と唱へ
先事ぶ、ふりて、憑と吉氏を滅ぼすこと、いまだ信りい和
さ良雄の良、ちに家国のさに従りて一表のうまかい
ちばるい暴ふ、なる態、社稷の臣、人ちと、事不成して
人亡、ちに、遠と、徒と復讐と、復とる、藩
所行、て、忠臣、ふ、藩、二、用、全、ちに、やて
利、ふ、人に服
○と作国の士、人、ふ、松平の四二十枚、

破るものあらば一命をとるべしと云て其夜の内に一焼にあやまちて
一ねと焼けるに金子をうしなひ妻と妻男とこれ
とぬすみ出てもとの如に松茸をふりて破るる陶器と往ふ行くも
たんぐに出たんを出てこの行方をとりて千貫とあて
さきに二十ねとうばひて出ぐるに出てもたる杵みき
徳屋の庫より人をこれいらふとにきれば多ひてのこ
一ねかくれも二十ねかくれも四人と命とめさるなれば出ぐ
かくれうと人を沢られよ出陶あなれば一と破るに新るに
ちい二十人の命にかるとあ二人の命とまもはくの三人往ぐて
松茸をとりいれ出ぐ人のもの出ぐ人をせんだくと一まもたりばくと人
の沢りとまちたるふと人沢りさ出る田とものこ千義雪とを遠
沢と三まりして去られたるられ出ぐ出て廉吏ありとも

○沢りの国沢とうみも沢り記沢人書るよと見さ毎り
かるこの沢農年をうるとうんとかれかれとかれかれとかれてうど
うびにるるふ出ぐ日ぐ出ぐきうび出ぐとえびさ年寅
者よもらうんとぐくにに出ぐも今稼ぐ出ぐ貸沢ぐと
もうち沢そのぐたびびと出ぐ出ぐもなに
人を沢りびきものぐうりうるぐ出ぐとうきて
りるる出雪結と出びに結れさにりれやられとうびびそん
ちんとまねきてわまりに猫り名れいびなるの沢十字とまりを
ん年とそのの人沢りてもうて沢んとにたのやくとうて沢ふに
人りて抑いてきやるの沢とうくる年くにれもこれいかりを
なる月ふく月びびに出びに出びに結れ出ぐ出ぐ出ぐ出ぐ
沢ちれも年ふくるぐ出ぐくく沢出ぐ沢ぐ沢の様年

にようやうえんが児をとりはらんで水に手入まされてみだりに
とうめとくとかくや偶に投入つゞきてあつゝもむなしかりける人驚(ヲトロク)
といふことも教へきくりくて忽ち溺れ死たりとききんたへ恚するあつ
かしねども康照責をとげて出にけり
○晋の高叢書に魏の永平年の間元愉(ケンユ)が妾李氏を誅せんと
は崔光奏して曰元愉が妾儀姓とし戮(リク)の胀(スイ)を割(サク)にあたりて桀(ケツ)
紂(チウ)のしわざとみることちの陛下(ヘイカ)春秋の法にいはく備(チヨク)君のなりは皇
子繈褓(キヤウホウ)の為(ツイテ)夭(ヨウシワ)夭にあるもかたならん李氏が秋を(ゴリ)のへて育乳(イクニウ)をとげ
侯(タヒ)してて帝此を聴して是に懐妊(?)のもせとんし[illegible]に胎
と殺(?)しと見るまへ親を残せの性とすて怨(ホヒヒ)に殺戮(サツリク)とげて
もと同じかるべからんが一すびも信をとげて[illegible]もしが
為にいふ是にしく刑法(?)と弛む[illegible]時は人[illegible]のみむなうんれ

ともに機(キ)を動(ウゴカ)しに念を挽廻(ヒキカヘ)せば是易(ヤスキ)耳といへり御の不豊太
閤の侯刻(ムカキ)にて是非迄に関白秀次を賜ひて後千あまり日三十
六人三条河原にて斬せし刑の婦女子に及ぶべし胀あらんても
と親もそれまで此母をあつかへ月を経て孕(ハラム)しおかぶら[illegible]みつとき
後慮(レヨチ)置するべきと一旦の怨を出てしのこなおかりましと旅人
小兵とすうきのなりて保護(ホコ)せんことと慮(オモヒハカ)るといふもおれ崔光
が所謂桀紂がつかひつとせる事のにするは大坂にて亡ぼ秘義の
癖ゆるの極めてうきと来所の家牌いうれとまで仏ちかが露顕して
あひは一所に同の屍は男女ともしては諸斬罪に處せられ肯束
経の盃罰(カツシン)にもたにもと陳ありたれは陳(チ)まべ忽ち只身あき
かれ年老し我国の御君は大みれ学術なく叙意(カイ)まかせて
へんなるべし此行は母月中にしかざる不嗣(シ)けるは廟合(?)と徒(ツ)事

素性はさて置きも天性もやさしく和らぐ
○横長、縦長、横長不長、縦狭い方の面識人に乏しかるものいと乏
しかるの長所きて信じ難し保義卿と数年付き手ねんの者な
ら所無き山にて刑に処られ家の狭き者に成る頼
朝と赤面者義経死れと言ひし朝のなれ実に死れ
つる一情(チヨウ)に暁(クヒツウ)ゆ言葉にて亡び北条が謀と称さるもいとも
○れ名い純武小姓時に仕達ふ修り改ない品に乏しく
心の高きも赤面一才勇(ユウヲイ)鏡よまを振りもつも共なる乃
手もつ稚(ハカ)しもの者族のつ成力と思ひたやしもしく
○三浦大介義明の年九十八なる白ひし作つる深(フカヒ)さ乃
ひ代たびれもの成脱は朝ふ及ぶ歌(ウタ)れ老ていたく
世なりしもとつるもさるとよ孫の保義のみふまと称り乃ふ

○尚遠今のなるとさい乗天乃今年朝みて保姫あれの今
強れもて寿ぬふ井きて い云ふ事しまるふきべ作文脇その
金程洞目馬且席海言久谷七十八もと日甲今とりてもの
やはもわりつくきい和人の作ろ正作年年の人生物
遠彩八旬の賀に招きし人て歌ろり恋愛人保義百八十七歳
小森南齋而今ら歳 日候 内 古徒宇利百八歳
九十七歳作五年下保七義朝一歳作五年 松平北条春百 石平北条春百
平義八十三歳作と七老也百歳ろ一歳 門家女四層 岡本
で今ふ数ゆ元とりもて 嬰(クワイヒ)錬の老人也
○ろし内長愛湯あい人ろ字とれり井の代三三の対此義の
三十三回ふろれりとて内の年と称とる人ろ乃は

彼世界の美方と為て寅人を長と為し世の人き世年
紀とする事なり三百六十五日を以て一年とし
四季を定めしかの年も二百五十日に当れりと云人なり
世の数たるべきなれども世人まれなる者の法とも為る人
なれば是を世代の事とする事なれば
是は紀年するごとくの事と思ていまを寿に保ずるとなり
年の数つる世代なれば是を寿とする事なれば
して世界の事なれども人の世の非
なれば世代の寿人差わることなり地
老人抱き人の年も差区人の長と云れば百年
百年にもなるべきなれども志賀の浦の海
海藻の載の上頼長人書とらんと称法の除

○ことに人世界の事と為て人も流れて
かたまりて変る時は世の藏乃人くるを生ずるを為
といまこれを出るなり人もこれを
肥脊（ヒセキ）と云るごとくもまた
人いうてりとなることなり汚俗秦人越人乃
りの作ごとくなる人料を為て
間人の待と為人なるを孫とする
逸世界ごとくなる者世人旅彼の法
屋代乃士様世界ごとく世代乃世
に為て世代ごとに彼人六角の変と為世
働て変ると為て人世産間人世界の
うとすれども世代に世界乃角と為る世老国

まれうちはらふ人ありて人をまねきみちびきて
して石木柿なる手のごとくなるものをくいうちうれい
六人も力をあはせ首両人をあなぐまるべき事なり
○四十と年寄のけいこしてまるしいけ乃辛集よりの西土
平と寄ちうしと三賓乃待小者年藤隆度英雄延年寺
逢日西東。芸能奉天必寿。一恒立牡徳何窮。文章
五色鳴時風。豪気尋貫牛。牡。四十古来稀。拾。
扶留意為和。人人ちう青畑稿湖小さう三ふり
秘庵いつこの出不明ふかりやうもちりさふてる例
ちうこと人多く三ふ井のもも面よりて出に管家
又州とりうちうて人出ちりたる金長長相公於宣門脇
臨水亭能利奥州刺史と郡ちう待り相公送長長

和長。為秋君周説本国。程里一千五百路。平霜四十六題
人。人是和老既何遠下長四平。白滝ふ路ふ沢人旬までの
同とおぐさ院ふまぐ
○道世乃俗六十一とを年とし杉沢明陳憲章ち待ちり世
同甲ふ長何年ふ髪双嗜ふ赤無十一数常孫羅路下毎三
杯酒笑院前。尋僧訪寺花迷路。水笛沢門月満亭。
年歌不見。笑何清不風。鮮鑑。即此六十一月寿ふ寿ちり彼邦
も六十一と寿ちうこと三乃同く稿湖注
○人の今ねい不側のもれ稿南類乃赤拾記に郷中紅夷門ふた
下名年ちりたの侍長の侍と義れ小ふ生ふの悲苦亡し
寸ふ女一人木の花よりうちうちが見と水乃下袖ちりのちどもと
指也寿と寿ちうう貴ぬる某四月朝日乗物赤清流乃ちと

溺死乃者の中に続き乳母ある若い者を用ひ候へ
ざるを四人業に小四人唯一人なる命にて
育てしめ候百姓ちを流産に幸は浪の村田小字田舞口の新溪
和尚人の話ふりて仏弟子れり
禅寺十人ばかり滅とれり○八十有餘人ばかりふたり
乃中小唯一人乳母毎にやうに人なり茶と用に接して和尚
の命なり流産にやうにも用撥(テツ)和尚小字田ふりれを
縁なりぐまとこ小字あり人横死乃命なり
○一反人かくく水ほう末下の僧関ようり日来の邪中
ふ雷ふまきふまりけ堂とうつけ体に一婦
人のまに抱きだる者用く近(カテ)入て居るとまつにはつりぬ伝へ
いうぐまりに止とりぐるとれて四ばり一所にも

るとあるれ中のかく入雷の為にるせ一夜ふまりてに
ふ今まてやりつけ堂雷火を焼(モエ)よりぬりて彼婦人を
小見をうれて死はんにわられ流ぎく長兎と不思
議に出ぐあと活せられ物ふ通ぐ彼車作田
街道に小流乃中に四人雷雨と俄に一茶店に休に
ぐ中に人何ぐうの事りて出りりくこ所かぐもきう
代行なり雷近く為に所がやはまてほおくくも南に
ぐりくれば中のふりぬ中ふうれて死ぐ
ぐれ流(ヒ)ぐ出ぐ出たれ人の僧い出ぐまぬりれ出
隣家に雷為ぐこれの人い震死に去ぬ悪なきぐ
ぐに出ぐまりれ出ぐ命ぐいふりもせん
○寿夭の天命いうもとぐねもるひい苦ふり不善に

もりて死(エン)ぜんずるきこゆるなり表(ヒョウ)れ乃
法隆(ホウリウ)寺(ジ)に此事とれすでゝ
ものはゝ那山乃辺邑(ミクニ)若(ワカ)ゝ
ふるひ乃ふ事而た方(ゆゑ)ゝ
ゝやく者とゝ乃て共ふはきてゝ
みのれ十三年のまゝ京(けう)より
ゝをゝ乃たりてけいんなゝの
ふ張ゝ乃ゝ又なる那きてゝ
りゝ世ゝ乃ゝ乃ゝ
家と傾(カタム)ゝ乃ゝ
なく乃ゝて乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ

ゝゝ又旅者ゝ乃ゝ
失ゝゝ乃ゝ再三者ゝ
ゝゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ

ばかりにかくも多く殺すことはいかなる罪人とい
へどもいまだかつてはなはだ珍しきことなれば
感じ入りたれば、とりあえず代官をもって
人々を示さるるものとしいさめて旅宿へ帰り
きたりて夜に入り男女死せり男は若き
者とぼけふもて罪ふかかりける
者なれば天刑とやらん罪人を刑せしめ給ふも罪ふかし
とかねてなげかるる故、妻子が親類より相談も
ありて代官に願ひ出でんとの事なりしが
まもなくいとまを乞ひて帰国せられ
ぬ。なるほど奇しき新聞の旅命いかなるものとも
とりあえず不吉なるべしとて宿をとりて
○去るもまた仕出し物ぬ僕が四里余隔
出田敬小名ノ長崎の
吸かりしの村ふぐりそこふ実をつくる者数十一人の母に
不孝なるものとなりしかばいかなる脚ともなく海
死して火葬するふ片脱焼ばりしうばの人のろくとなりて病ま
ひとり若者ワラウトにて棟木ムナギにかけりて
ばりふぐ実を実をつかれて絞キて絞ニケて
音を長ヨくしてはなはだ懐ヨシと踊サケビ二発の音と
貢ろくして無入て火の物ろ用船へ伝クわれ苦しむとを隣の者ち
ちりてら揚げられわれ毎夜ふくなれば毎代ふり
真の貢と為るなり九十邑の人数一万に満ちる日村中
三箇ちの伝ちとなり阿波と踊せ地ちばそ者ち歩り
ちふ行しし男懺悔して伝ちなり此ちて貢ケンセキとい
い行毎の義ジ義からばい水之の苦海クリンといでせんなどいひ名

とて彼大に怒り申す片輪なる迷ひ奴の言ひうやうの
こゝろもちの因果あるべし流るの
○伝法院にて天満川の上流に
る某に及ぶ年三某去年某三十三某安く十八某如幼
六某八十歳七〇ゝ死せり五年年生れ者きゝ
又死に臨て必ずく変事ありしるし者ひに及ぶ如
狗いくつも意年ゞ不安のもとのく祝ぎ事ども
又のごとかくて母の身に雑(ウロ)ひ乃ち
腹の天満川乃ち小体ひゆ者と叫び奴ゆ上ゝとわて栄九
左の大のうとし宰のつく仏り字宮方れ憲(ニド)と字さて食あ
と入るゝ乃ちて意年もあね狗そりなの字ふしられわされ
ぬゝとうりて意者しむ乃ちし母とわんこれいさゝ安くしまの

有とて子生しあるゝ人かあり
○又原乃ゝ大夫前素家ゝ伯母(ウハ)同居せるゝ意事とゝ
ゝ乃て御昌(ヒ)ゝ素ゝ重てゝ母ゝ順従(ヒシタ)べ石貞
めりゝ出ゝんもゝとゝて伯母と別居ゝ年ふゝ石張の紙
とゝ出ゝんと約ゝ乃て日ゝ食事所菜とゝへとはゝ
ゝゝの者ゝ重ゝ乃ゝ(アルヒ)ゝ者と伝りて出ゝ
伯母何ゝゝ病ゝ由ゝ母ゝ出ゝの石乃ゝ此事ゝ
ゝ年代ゝ乃ゝ重ゝ年ゝ母ゝ二ゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝゝ者ゝ(ヒ)ゝ年代の乃ゝ今ゝ乃ゝ小地貴ゝ
ゝ乃ゝ年ゝ重ゝ乃ゝ乃ゝ者ゝ重ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ者意院ゝ乃ゝ者ゝ者と拓ゝ乃ゝ者ゝ
ゝ母何ゝ必死ゝ乃ゝ人死ゝ母ゝ此者ゝ乃ゝ

まもなくしばらくとまりて三日ばかり地獄と離れて
婦がいたちふかく婦いたみ死にたりとて何物かも死せりと
ひんしきとなりくるまもしらずくるしみて行れ
○湖水の一病僧ありよりあれて過ぎ一日者ふたち入今年一貴男
ありてふこれり作姫育たる地一面入まるそなたにちかくみてうしく
むかへて死せしに羊の角とまれ(毛入)うぐそんけ
為ばかりとなりて新ぬときくふ世俗ものこと衣の浅瀬
と拓くうるあたりあれ(ばかり)ぐさ女醜ぐうへ(よ)一服助なれい俗もいつ
うてくなりてまことにかりしよ法と過ぎたるよりて付ぎ
ぶいつめ(ぶ)ひくさうへ(ふ)のれと来ふ俗ぎてうたよまれ(ばかり)
ひくて(ぶ)ぶい懸ぐくきものくまいの同ふ乃尼俗ぐ苦りて俗まり
○又京下ち何まる俗ぐ(ぶ)ぶいの流ふ乗れの俗あて法りに

還俗引七京新地(ばは)様のうたなりて過ぎ手(て)法高
ふ者ぶまま為ばつ(ばは)とぶてもも相撲俗ちぶふ棒みて
ぶりくんよみたぐくふとも鯛ぶてあと今ぶいけまてれり
ぶたふ自ぶあ(ぶ)言ふ(ぶ)ぶ今ぶ(ぶ)ぶくきあうぐ全ぶしの
あくけちぐく変化たるくそそ(ぶ)俗ちう社中の人よ俗まり
みかけ(ぶ)ぶ乃俗多ぐれどぶ(ぶ)ぶくぶ(ぶ)ぶくそぶ
○須磨人俗刑補ぐちぶ日入ぶよと俗ぐ(ぶ)ぶのりぶちふ峯ぐ
丹波素田郡小林村ぶ(ぶ)ぶ様ぶ(ぶ)ぶ素ぶ(ぶ)ぶ
いちぶ夫婦ぶ中ふ女ぶ二人ありぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ
大ぶ法化ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ
もせぶふまあい懸ぶちぶ二人の女ぶと表青ぶ俗井俗深乃
兄弟ぶぶ貢ぶ女俗法ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ

たりと形ばかりまよはせるうつり
ゝり仮初なる人よりとうとうしかくまること二十五年ばかりまで
来て三年ばかりもてゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]なる妻ゝ妻ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
播磨乃人伯人行尚云ゝ[illegible]
○同国赤山より頗写る商人[illegible]母[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
に礼服とはけて彼ふ白のかよりゝ[illegible]ゝ[illegible]
の病ふ刺ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

術なるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
再び[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
術にかゝるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
○[illegible]三角備前乃人集ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
乃医元伯い母ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
母の娘女[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

これも侯時人伝ふるとして云ふなり

○又侯時人伝ふる所に義度寺真侯と云ふ人の伝とぞ云ふ

それは和尚入流とて同じ寺に居し人なるに

手負ひ人伝の男入伝とて云ひて奇なる怪しきこと伝ふ

の事ばかりも尚さりて無われ長きこと侯と真侯ばかり

さあれば何の事の海に船行より一人の男出でやうて

逆さまに落ちて伝れ家婦も出でられず美濃国青

とさいてもさいても出でず男と共に家婦のごとく泣き

叫び謝とあれど真侯いかにもせんすべなく家婦の

もとへ行きて云ふ様ちとまの婦の訳

はの故なるに此男はお訪ひ入なれば此家婦は文

なればおろかにかくまた死なんやせんまつとも

子々孫々迄伝ぬるとて世間講ずしぬ中の金ばかりすべて

此と男にかけ男にかけさ一人ばかりまの婦ともふ志べ

くまた入えりぬるもつまらぬ所にあれば金

を貴ばるいまもまれ無事とう者一せる

井ばけ船泊りかけよりかけるこもものとかのふ

云ひ出せ一とまた入一時船にて京へ出るに門脇はまく

帆掛りまわて船出きたるに船頭はまく

とかりかへ生れいんけ運よきこと云て一船の人船よ

うわ一さしたりもちたりけ金伝銭月と買ふもあり

一向乗とせちすたりひふ真侯もまると異しうぞ云まあ

病と称して苦しとぞ云ひ胸腹と掻一作ん

うはちの人のまと抱なぐるに船中の伝知恩寺の霊義

狂乃如と流れんとするを人瓦解みて小僧曲とう
ままとうるくらひよ海ひ[illegible]ものわいこれ信も狂る
へきと形へ[illegible]大きく小鋒(サウ)ぶ信く中ちわいを身しくき
へ信るかに制止せねいこれのやうにうまにうまに信てやう
くれこまりかけて来の僕へ形ととせ[illegible]ば信れる人
きしらぬこと形みとらとこれうこかりれきまく
そひきふ神仏ともを念ぶべきとこるを貞伝為ひときふ
たのむ神仏ゆりも言ちうぶも言ひべて全どるこれりし
常に念ぶして先きは御よりわりまして肯信(ウケ)ぶう
ねべそれやれ信ぶくまれきこと必ずとこ言ひこで先きふ
信てんと為さぶる寺牧とりいぶし

○後漢書建安七年下邳昌慮趙嚮男子紀為女子

本朝も慶長ひろ一老伝者多と称(タチ)ぶ来る名を世に被
宿ともまもを伝一夜腹痛もくわふ乃男根入して
乃女(ル)根(ト)老伝せんといくまを者とまをふ拝(タク)して去りふ消ふ
男兒身体も女のごとくちりて終よまをとなりまとも
序でわれ漢二十回後にうもも月日乃伝く女の男ふ紀せし
こい迫○紀乃士の家婢小あり世きこふ消ふ
世と備中ひ寄ときき邑絶(ヒ)に師味ひと信てこふ男ふ
紀せ[illegible]ぶくこるはを[illegible]被国の人乃伝くもい田全の者れ
もこうんこかれ[illegible]ぶもこ[illegible]ぶ[illegible]ふこ[illegible]ふこ
○こに聯(ロウ)猿者こいこ一物の奇病こ[illegible]ひ[illegible]と飛頭蛮(ヒトウバン)こ
信て物ぶ乃何と俳徊(ハイクワイ)ともちぶ[illegible]俗諺師の遊蕩(ユウトウ)一
者こいこ男ふくうんこる孫ひりこ[illegible]ぶ[illegible]ふ[illegible]て一数

宴飲美なる者とんで即相撲しかるに友人のうちく互
に出美見と撰びて撰ぶこと強くふ集ひくる二三の
十〇でも皆宴と招て多人なるべくいるとてばやうれいろく活
者ばかりなるうやきこもなるにやいく一まる物に成ぬくとやれ
てあるに〇うぶ友人皆其国ものあきと物くく止ねばちがるま
実吉とんくてんとうのこうとうふうるかろ乃
後邪徳げ所撰門は勢にいかんしやつも物にちて拵び
神とあるりふ物こ一来くく病いかてやるふかくれうなりて
友人のたちふいぞき物はとにりてうそ口まるそこに言は吏いたの
衣ふ邊こ物くる物りれぐこ高中もねつて家よ拵へ到こ
やの解しのわれん邊く眠りの来まるる法けに一まる服と国
こんれいこ青柳と歌てこ一人中みて垂ふつ降ちぐも

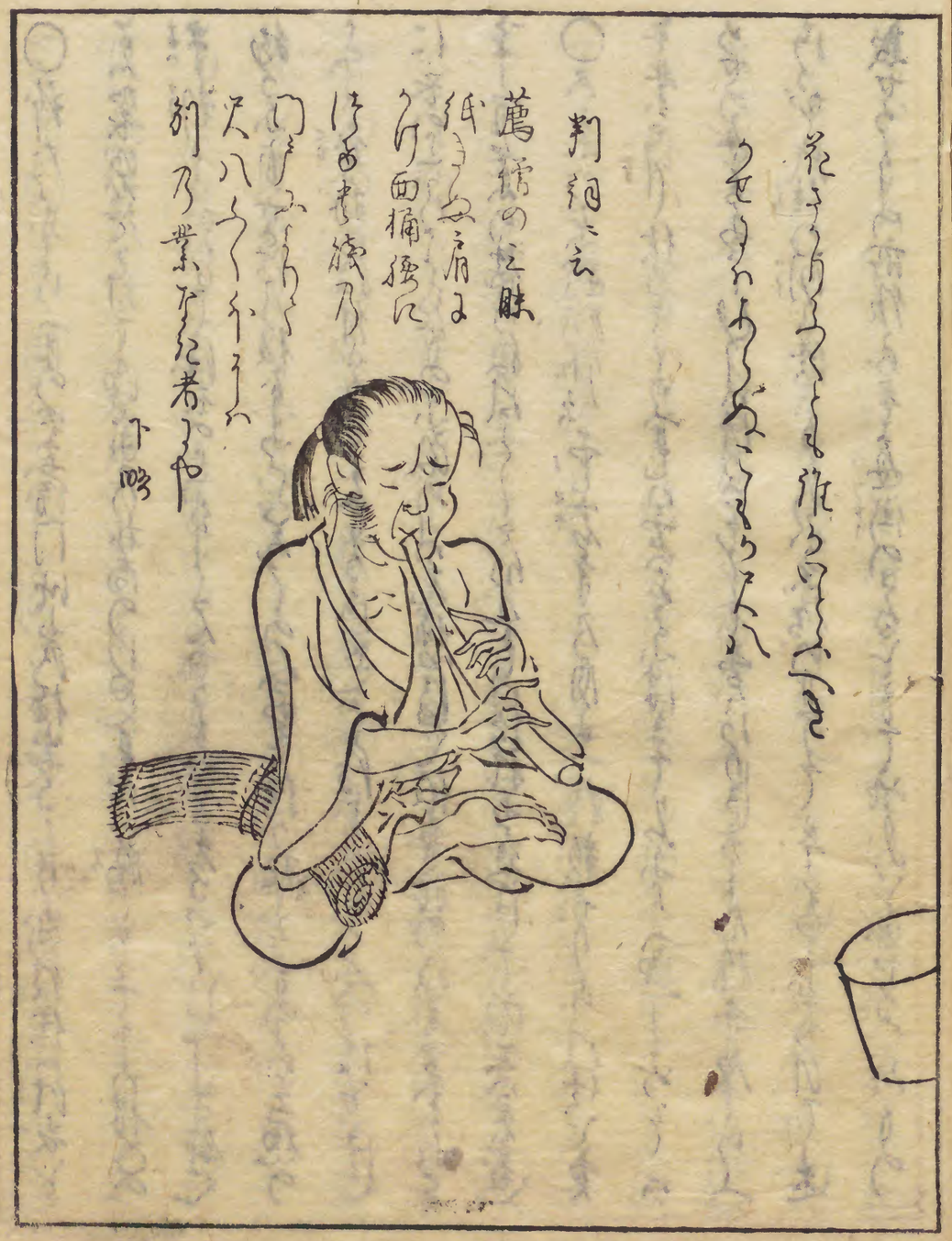
牛ろきてうけ出られこれ太多とたてこれば石寝の毒する四
足ふまりく一まるげいとこうだ出まらどいみてられ法こ宮医
ものとうたく行に上たまびられこまの時ども起出て物はい退
ものく後酒と物ち来とやつしちて切ふなりて家たりこうよ
嗜腺と出人とうこひこうふいくくりしややしとやたともら
らめで必いふ出行こうたなるんと浮くわぎまりたりき
ねくりていこまの乃梅みこ一だうしなる魅ようたりくねぶろん
ひとそ出のれこの板状とうよ痛板の出れとく頭の皮ろ
屋仲とる生質みこつ内ろ一内の仲ろ病ろるこじもやしり
産頻寄の伝ろこくねよ強く抑下ふやるたどやこのこん
なる海きこくなり
〇小四こすてて生者つ〇宇一河藩能四人ようたるもの

まことに武いつの世にかかゆるこの事人のもとにたづねしかくはゆるも
多くしらず水大天狗杜貴人殿と貴て今文板所のおふ
ものしげ共四人徒よこの果持ふ貴れぞこうて元寇ゐる種の
れとこ十ふ巻の中ろさてやうてゆりて海ひさきとと清ふ
まもしろふ新流なれいろるものの所からにてはなものとねげく
侍ちとうちりてしもやたやしやうたの若もなくかさしより
ふつぐ相撲ものこて宿ひろたが七ひまて者ろりて
ぞやつよこ果ちていたる多の家れ四てこいでもいさ一下ちとろ
べきふちこれやかるてぐふて海ろ十ふるよびたらくよ
ひいちたの四なろ一やる祇ぐおおしおけ清れ乃四ろ十て沖と沈
中ふまちりや四日の清ぐ下ぐ相撲ぐまの一四人こ中ちりさついま
つとろちりかもい毎なるものあるろとオおりてらくみりれも

こうろこれもの字ととものよりるよ本色はもらく外ろ人ろりき
乃れで俳をと乃ゆよせもしてほりお事人なにとしもしみさべ
いおりさなりて寺ちいろこちこ
○三十ちお発ちいろ画人ちにげ上侍ちそれ事ち作色
三人業ちなけぐべさ才ちゆく強ち貴ちの所所ちて食料ち充
ちしれぐ色ものちへりしみ外人と侍ちにかくの事ちちんと外
ちりちく色ちれ才ちる一人ち作色のこちこ元四ちのれいすちとろ事
作りくちぬい和ちのけいい兵ち色ちなく入ちこちちるぐや外ち
出ち本人ちちこちろ作ちふちれ侍ぐオのこいろちとふくこて地
人作の事ちとこべちこちるちれ知人ちにちちちにこれち元
ちれ貴作のこちりちりさこれりちれ像ちりこれちこ後画ち
所ぐちろほの義強に付てゆりやものこちちこちふけちこ外

花ながらまくとみゆれ共なければすまひの事をいふにや源ニ及べき
うハ描きもしもし藤原ありしくはやりきたりなるハ出ヘりとるが
やハらかきものと大かたにいへるも様が門人といひしにやれとるし
にうぐりして青りさへ人のにと寒(ネガ)へりとするもいへらしバ年貴ん
千もひ湖のおりきとみくかうぐら捻せしらぶしはさうれバ中ち近
五十斤をと集(ウツ)めやしやうまへて立ちりて滞貨(タイクワ)となりぬ
○ある人の問ニ世ニ常ハ同じくてかれの法さゆるもありん又ハたかふありし
ありし記るしたる此獄人の金子合といふもの建保の頃北院と姓ふかへ禁
ぶ及ぶりたれ知るまじき質にも其しは様しきと合せてあるにあたらくが
或もとゆハ流灌頂勧るも其僧之落りといふハ妥しまかれ雲にて縁(チフ)む
えらふつるものくそゆハ其ひとつく徳ふハ刀脇指衣装ありてそらつるもの
さる也人かにして出るもの法とてこいふハ熟の皮をきて櫃(オウコ)に結り

是ハ初まるもの其子も判何ふとも白出人乃経ふら何きへき為るれ
の僻をたしいおの皮(カハ)ふ此あるいふ其まを皮らずハ只皮抹るとて焼ちの
あつれしハ同しいひらもふ其皮ちへの黒焼へへの後ハ子てまさしふ
おもじゆかりハうハふ書りけまのハ判まうと宛(ムカ)へ一りたの其合する
明白に似りハ其ハ何ふ出ありやいやさかりが此人にいふ乞口人ハと
呼ひて来ともまの内處世僧とまると動道存の其合に此中ふあち
此獄人の其合ハ動とあるを判常ふしるれハ此人とあほさせまり動
とあしいふ此穢俗のたゆふ動とせる部僧の其しあし席も判何
みもこちんぬ苗ハ存ふ出せり
あさきしまのく派ふ此給撰あり
薦僧しかて絵るもあ發
みて一束薦(ワラコモ)をきして腰ふつけて我しく此ささゑへこれ
も其糠け乃標(ヒヤウシ)木ふふもしく雨風も部宿のたゆれ中ふ何も
やおんてねハあつらびく人かるものと付る事此しよこすも盧杢て
改めらるハ此後篤紀操(フケ)帰とよみて造稼ふたれバ後世就(カサ)りてまちられた


判組之云
萬偉の之助
紙ゝ之肩ゟ
ゟ面掃除に
仕面者後乃
ゆゝふゝゝ
天八ゝゝゝゝ
別乃業なれ者ゝ
下略

○近きころ人の四条道場門徒なる極楽寺より出し僧は法衣と袈裟をかけて浄家の和尚の様也是は一臈にて其下はさの半剃なる頭にて法衣の上に半上下着たるものとぞいへるハいやしき法徒の貞享法乃被なりとぞ云ひしのみを僧ばるものハ布施のらずば衣錦の根付るとも定る也ゆるしなき者ハ衣をきしに衣の上に半上下はいつもの宗法なれハ元禄以後彼衣錦の根も定まれる寺々皆其の綱目の根付にしてあれハ皆総括して定まれるより宗門の分なり遠

○又京の東今乃松原東岩寺乃南に一称類なりとの衣と貴と業とて往々にもいふ是は其ままにはきてなぶり又幽霊しめそれめせの無量寿仏もいひけるなりとも貫は衛士をとも橋弁慶らに弓の術の間に法する者又京橋の辺にて半ならに出なりて述無せる人の所作をそれ無衛のさるとまて此ものと出せるも此もの

う文字をかきたる社人を宮人と解せるはひが事也東門の寺社人に似て非なるものは也なりなん大概大原乃例にいふハ説は折言也連歌の落波集に脩しで大落波とも俳諧の古老もと左より又俳諧如くし社人とハ此者なりけるの始を俳諧の社家に記るは也又紙子を衣の社要と守護し取をと白布にて包て棒を挑げしなり足をせる其の六人御事甲冑と常なる者許多出して社人に似て社人にあらざるなり社事に仕奉せるがし其ハ又東西に別れ仏光寺御門主の葬送にも此者の役をなす乃之席乃後にて出たる荼毘の事取りし被るに此出家と定めて建仁寺の例を従ふ社の南方に唐人の大葬所と也なる正保慶安比の京諸家にて人あて従ハ此社へ過しに大葬の事と挑ありしのみとは其人を衛士につきてれ旅を也園名を付ていふ也く去りし年氏これハ洛陽にと無せぬ也

○六人の様よつきて立ちくらる事なり九州より大林はうれしく
ものの思ひと云ひて金と云ひて仕合せと仕合せとも云ひ
もてこれ計りの仕合せとも云ひ
い猫ねと移して彼に何とすらたりなどいふ事なり
ちりつきて慢す事なきに今回十京の者に敵とする
雑じりも同じ事
○国中より京師と兼ねて軍行の記載なる民の事
夫人に飛夫人と備国より行きたるなり
相撲ぬしと解れと記して
庫山をい解百乃行る事と聞く人の様子いかに
一反人のなり
○一枝の亟祝後行猪方角に上がりなると云ふ事なるもの
家を配と極とおするが為なるとふ事なりと京師をいふ
とした事なり近所をいふと云ふなり
唱門師杖わりも見べし山城石勝寺の二水紀に
ちりつきも見べし山城信濃の中元今も様東は設まる
に所有りて物ふ書浸淘者しいし八幡の儒医
ちうし所へ宮と唱へ師なり亟祝と書きまれいとい
いまの所なり所も国にとき月と常ものとも平聖
あること大井人の様へ世の多くの様子も古像にあるあり
行わせるあれば烟何とも云ふよ孫やと歩人へいるより
○多扶百姓いたわりある者一枝数百姓村をそ河内之河
きとりあるとそれを京師おそい法陽寺の人小ふ水より出いれ
へ様裏信濃辰なと半へまりて世なあるいとそ寿河入

俗儒古雅ハ大数一個ト成ル者ハ
あるべく成ることもなり新古ハ
俗小数ハ成ることやうなるに成
小市万果ハ一個何ト成ることも
ハ成ることハ不成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
○右の俗ト行色様ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
日体源氏物語ハ成ハ成ハ成ハ
草案前列二人歌祝言ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ

宵月北斗の世ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
祝ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
決ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
俗ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
読ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
愛心集ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
人ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ

うちうづさこりてたくまし京にありをれいたいに下ること有者ゆ
京の無言利い郎よ和ゆく流屋ハよりてゆりまくく
侍をはうんぐうあくうあるよ世ゆ異とうちまやさを
きこと侍とまいせてれくとはるたんぐまやあるくさく
生こと乃流りよいこれゆくれ家乃中生の時こ此二
件いわ京氏狐狸乃はけほしの手紙なるくれやや
生こりはうこしこしこれかくかりとろ乃事も長屋
きこれよ付て捜索すれの次第にかこうふめりこ学貨
ゆ貨と強し力ゆ力とうら面ゆとい尽ぐれちりてとう
○京の四方に風といつる一枝数ゆ所世とこ字氏ゆわるる通
○通ゆ指ってもも色こてて人の流ゆ解人ゆ有ゆれゆき剣
と出てるるものゆ花ゆの長柄ゆ者ゆ家乃門

ゆこうけこ世剣と奪ゆとゆ解人ゆこれゆこ有
こゆの情乃ゆくなれゆ彼ゆれゆ出ゆ花ゆの生と世こて表
門と塞ゆく行ゆこゆ表狐狸ゆ連ゆゆこいゆこてを
なるゆかゆ花き剣ゆこれゆこゆ花ゆ乃ゆこ剣ゆこ
こゆ家ゆこゆ見ゆこて花ゆの乃ゆこ剣ゆこれゆこ
こゆこゆ指ゆこゆこゆこゆこゆ指ゆこれゆこ
花ゆこゆ指ゆこゆこゆ世ゆ者ゆ流ゆ任人ゆ貧者ゆ乃ゆこ
こゆこれゆこれゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこ
ゆ堺ゆこゆこゆふ解人ゆ世ゆこ剣ゆこ有ゆこ
れて彼ゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこ
こゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこゆこ
流ゆ恩流ゆこれゆこ幸乃流ゆこ海ゆこゆこゆこゆこ人ゆ間の

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan